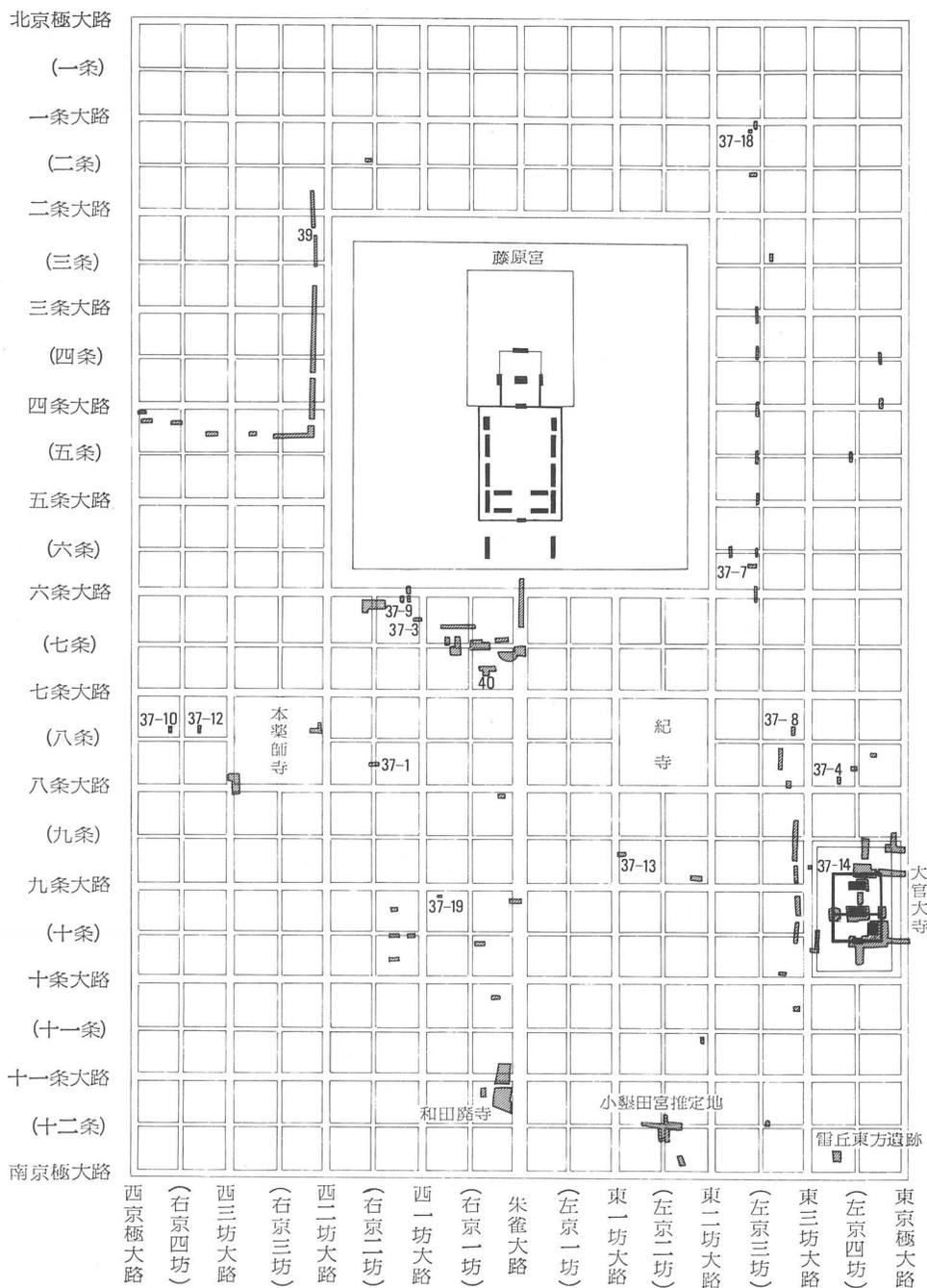


II 藤原京の調査



第13図 藤原京内調査位置図 (1 : 20000, 条坊は模式図)

1 本薬師寺第2次調査（寺域東半部）

（昭和58年5月～6月）

本薬師寺については、第1次調査として昭和51年に寺域西南隅の調査を実施しており、藤原京の八条大路と西三坊大路の交点と、本薬師寺の西限を画する施設に関わるとみられる南北溝などを検出している*。

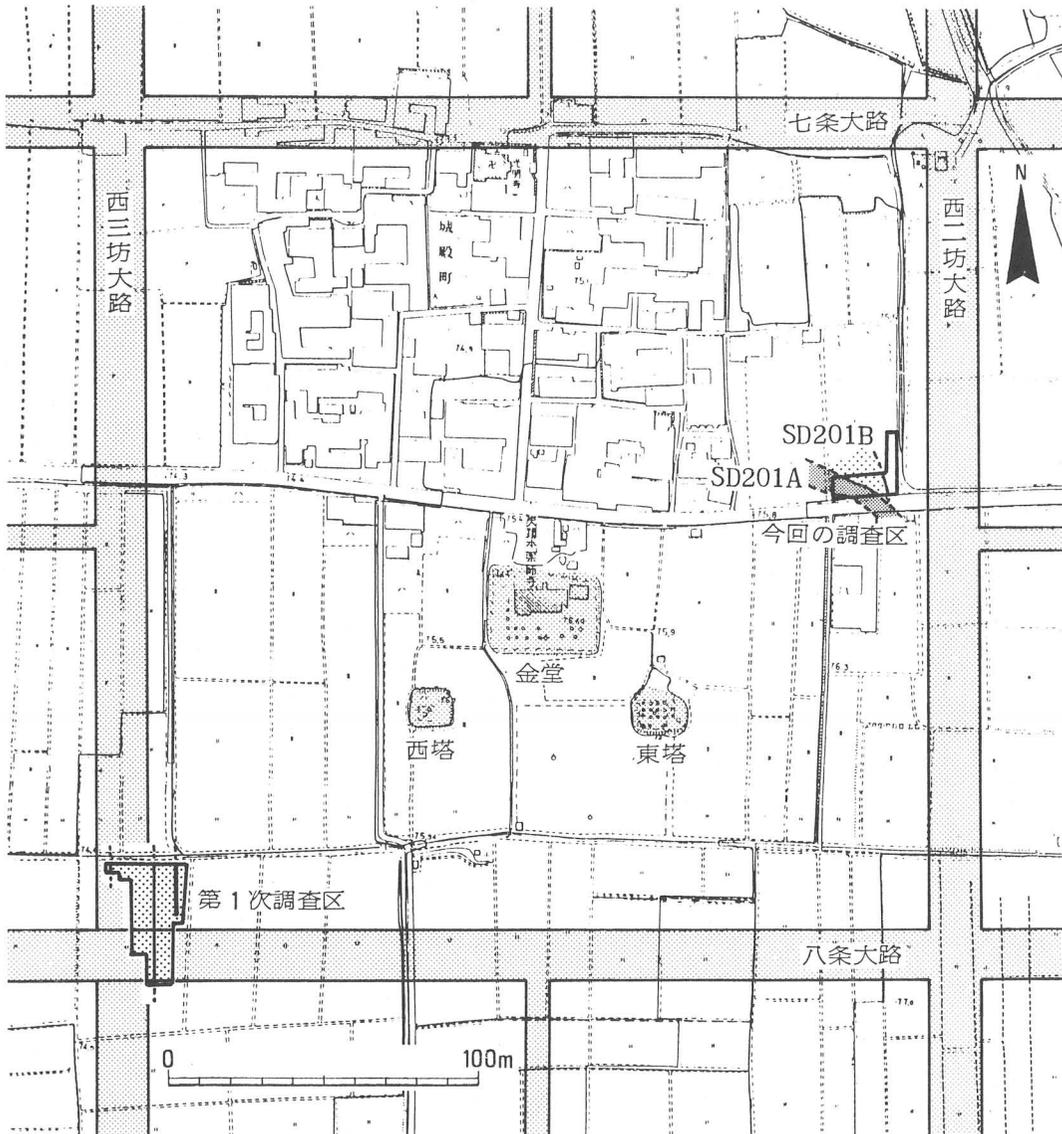
今回の調査は、宅地造成に伴う事前調査として実施したものである。調査地は本薬師寺金堂跡の東北東約100mの畑地で、寺域を東西2町とすると、その東端に位置し、西二坊大路に西接した地域にあたる。調査面積は150㎡である。

調査区の層序は上から耕土・床土・灰褐色土・暗褐色土の順に堆積し、黄褐色砂質土あるいは粘質土の地山に至る。遺構は暗褐色砂質土の上面で中世の細溝群を検出し、地山上面で自然流路SD201A・Bを検出した。

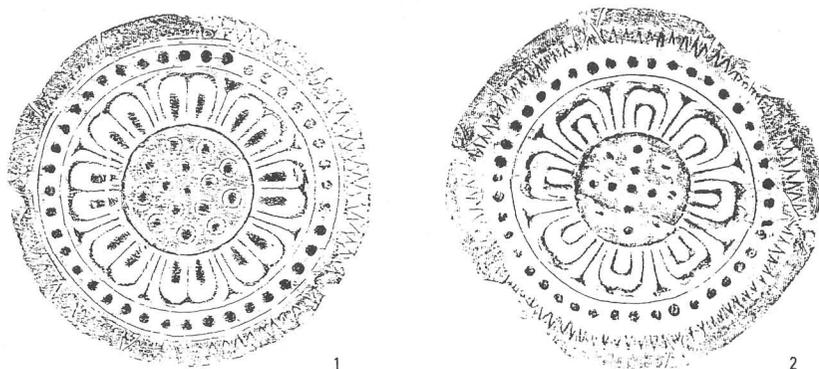
SD201Aは東南から西北へ流れる幅約5m、深さ0.9mの自然流路であるが、本流が埋没した後に、北へ浅く広がっている（SD201B）。SD201Aの埋土は、粘土と砂の互層からなり、当初は相当の流量があったと考えられる。下層からは7世紀前半代の、上層からは7世紀前半から後半にかけての土器が出土した。SD201Bの埋土は暗灰色砂質土であるが、最上層には整地層とみられる凝灰岩片を含む暗茶灰褐色砂質土があり、その下に数回にわたり投棄されたと思われる鑄造関係の遺物と、7世紀末の土器を含む黒色炭化物層が調査区の東半を中心にひろがっている。

SD201から出土した遺物には、瓦・土器・木製品・石製品と鑄造関係の遺物がある。瓦はSD201Bから出土したもので、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・隅平瓦・熨斗瓦・面戸瓦がある。いずれも本薬師寺所用の瓦で、軒丸瓦は単弁蓮華文の6121Bと、複弁蓮華文の6276A・6276Eがあり、軒平瓦は三重弧文6553、変型忍冬唐草文6647Caと6647の新型式が出土した。丸瓦は玉縁を有するものと行基葺きの両者があり、通常の大きさのものと、一まわり小形の例がある。平瓦にも小形の例があり、これらは小形の軒丸瓦6276Eや、今回は出土していないが小形の軒平瓦6641Iとともに、塔や金堂の裳階所用の瓦と考え

られる。土器の大部分はSD 201から出土したもので、弥生式土器（畿内第五様式）が少量ある他は、7世紀前半から末にかけての土師器・須恵器が大半を占める。この他に、暗褐色土から平安時代の土師器が、灰褐色土から中世の白磁・青磁・瓦器などが少量出土している。木製品は主としてSD 201 Aから出土したもので、独楽・曲物・井戸枠板と、用途不明の木製品が数点ある。石製品には、SD 201 Aから出土した砂岩製の砥石と、黒色炭化物層から出土した石灰岩製の用途不明の石製品がある。



第14図 本薬師寺第2次調査位置図（1：2500）



第15図 軒丸瓦 (1 : 4, 1は6276Aa 2は6121B)

鑄造関係の遺物の大半は、黒色炭化物層から出土したもので、韃の羽口・口径13cm前後の薄手の土製埴塼・

鉢・木炭がある。埴塼や鉢には緑青の付着が認められる例があり、これらの遺物は銅製品の鑄造に用いられたものと考えられる。

今回の調査では本薬師寺関係の遺構は検出できなかったが、寺域の東北部に飛鳥川とほぼ平行して流れる自然流路SD 201が存在したことを明らかにした。このSD 201 Aの下層からは7世紀前半代（飛鳥Ⅰ・Ⅱ段階）の土器が比較的まとまって検出され、この地域がこの頃にすでに開発されていたことを示している。またSD 201 Bの最上層である黒色炭化物層からは鑄造関係の遺物とともに藤原宮期（飛鳥Ⅴ段階）の土器が出土しており、その存続期間の一端をうかがうことができる。したがって、SD 201 Aは本薬師寺の造営前にすでに存在し、SD 201 Aが埋没後にSD 201 Bに鑄造関係の遺物や土器・瓦が投棄され、造営がほぼ終了した7世紀末にはSD 201 Bも整地されてその機能を失ったと考えられる。

以上の調査成果は、造営の開始時期については明証が得られなかったものの、『日本書紀』や『続日本紀』にみえる、天武9年（680）に発願され、文武2年（698）にほぼ造営が終了したという本薬師寺の造営経過にほぼ符合する。また、鑄造関係の遺物の出土状況から、SD 201の南側に本薬師寺の造営に関した鑄造工房の存在が推定されるという成果も得られた。本薬師寺の周辺地域では、近年急速に市街地化が進行しているだけに、今後早急に計画的発掘調査研究を推進する必要があるだろう。

* 「本薬師寺西南隅の調査」（奈文研『飛鳥・藤原宮概報6』）1976・5

2 左京六条三坊西北坪の調査（第37－7次）

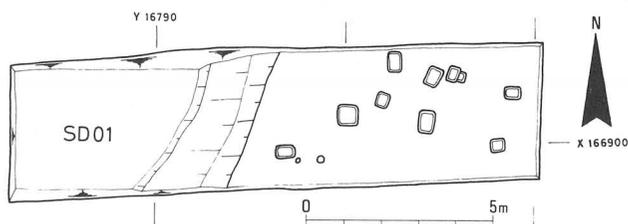
（昭和58年9月）

調査地は、天香久山の西北方にあり、木之本町畝尾都多本神社境内に、市道小山線をはさんで西接する場所で、藤原京条坊の左京六条三坊西北坪にあたる。調査は東西14m、南北3mの範囲について行ない、藤原京造営時期より古いと考えられる南北溝や、所属時期の明らかでない小穴群を検出した。調査区の層序は水田耕土の下に茶褐色砂質土層があり、遺構は、現地表下15～20cmのこの砂質土層面で検出した。

南北溝SD01は、調査区の西半部にあり、幅6m以上、深さ1m以上の溝で東岸は南西から北東方向に斜行している。溝の西岸は調査区の外に想定されるが、調査区内では溝底の最深部となっていないので、おそらく溝幅は10mを超える規模であったと想定される。溝の堆積土は上層と下層とに分れる。下層からは6世紀末頃に属する須恵器が出土し、上層には押型忍冬文軒平瓦（7世紀前半）、丸・平瓦、それに7世紀後半代の須恵器、土師器が包含されていた。

南北溝SD01は、規模や形状からみると、むしろ自然流路であったと思われ、その位置には藤原京の条坊地割との関連性はみとめられない。また溝から出土したものと同型式の押型忍冬文軒平瓦が、かつて「都多本神社西」から採集されている*ことや、今回出土した丸・平瓦が調整技法や大きさなどの点で藤原宮所用瓦とやや異なっていることなどを考えあわせると、この南北溝は、藤原京条坊建設時まで存在していた自然流路であり、さらにこの周辺に藤原京造営以前に建てられた寺院があった可能性を指摘することができよう。

* 岩井孝次『古瓦集英』（図版第30—153）1927・1



第16図 第37－7次調査遺構配置図（1：200）



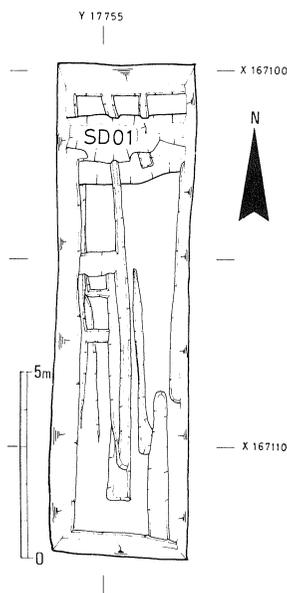
第17図 押型忍冬文軒平瓦（1：3）

3 右京七条二坊東北坪の調査（第37－9次）

（昭和58年9月～10月）

この調査は、橿原市飛騨地区都市再開発計画の一環である共同浴場の移築に先立って実施したものである。移設予定地は藤原京条坊の右京七条二坊東北坪の北端付近にあたるため、坪に北接して通じる六条大路の南側溝の想定位置を含めて、東西3.5m、南北8mの調査区を設定した。調査区の土層層序は、厚さ1.2mの整地盛土の下に旧水田耕土があり、その下に3層の褐色系粘質土が堆積している。遺構遺存面はさらにその下の暗茶褐色粘質土面であり、この土層には弥生式土器が包含されていた。

検出した遺構は、中世のものと考えられる数条の素掘り細溝と7世紀末頃の東西溝SD01とに限られる。SD01は調査区の北端近くにあり、幅は1.2m前後、深さは0.15m程で、溝内には粘質をおびた粗砂が堆積していた。この中からは、7世紀末頃に位置づけられる須恵器が出土しており、SD01が藤原京に関連する可能性が強い。ただし、昭和55年度に、今回の調査区の約6m東で行



第18図 遺構配置図
(1 : 200)

なった藤原宮第29－7次調査では、SD01に形状が共通する東西溝SD2909が検出され、六条大路南側溝であるとみなされている^{*}が、その位置は、SD01の南約2.8mにあり、ややくい違っている。藤原京条坊道路は、平城京と同じように、方眼状の条坊計画線の中軸線とし、両側溝はその中軸線から等距離の地点に設定されることを原則としている。ところが、六条大路については、SD2909を大路南側溝であるとすると、条坊計画線はほぼこの側溝の位置に相当することになる。こうした例外的な事象をどのように評価するかは、今後に残された問題といえようが、今回の調査成果もその点において注目される。

* 「藤原宮南面大垣の調査（第29－1.5.6.7.次）」（奈文研『飛鳥・藤原宮概報11』）1981・4

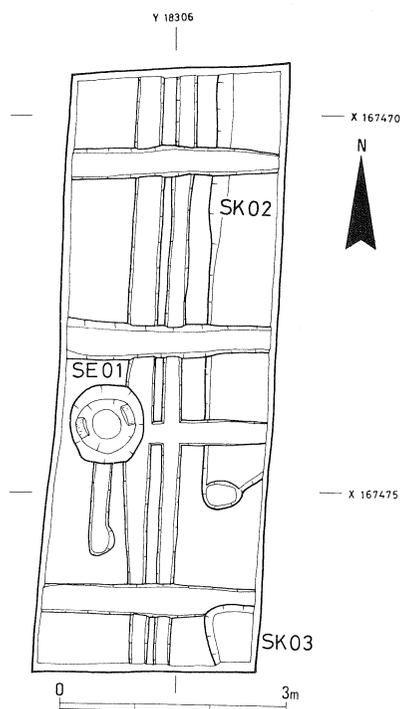
4 右京八条四坊の調査（第37-10・12次）

（昭和58年10月）

この調査は橿原市城殿町の集落の西方で、近接した2ヶ所（A・B地点）の住宅新築に伴って行なったものである。いずれも本薬師寺の金堂北に通じる東西道路のすぐ北側にあり、藤原京の宅地遺構の存在が想定された。右京八条四坊北西坪の東南隅にあたるB地点では藤原宮期の遺構は遺存していなかったが、約65m東側のA地点では小範囲の調査ながら、藤原宮期の遺構を検出した。

A地点は本薬師寺金堂の西約230mにあり、右京八条四坊北東坪の西南隅にあたる。調査区の堆積土は水田耕土・床土・暗褐色砂質土で、その下が黄褐色粘質土の自然堆積土（地山面）となる（表土下約45cm）。黄褐色粘質土はB地点でも確認しており、遺構はこの上面で検出した。検出した遺構は井戸1，土塋2で、いずれも藤原宮期に属する。

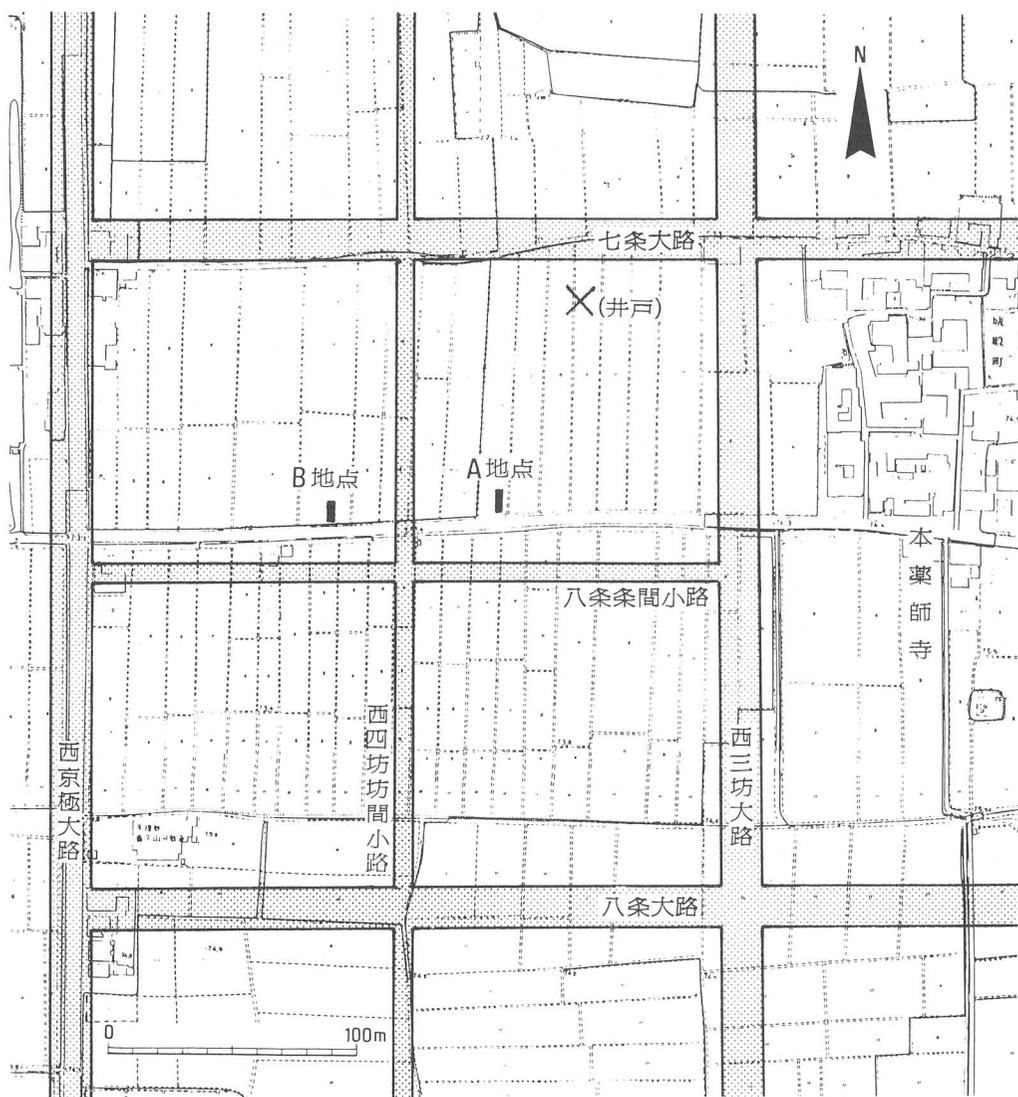
SE 01は直径1mの円形素掘り井戸で、すりばち状を呈し、深さは検出面から



第19図 A地点遺構配置図（1：100）

1.4mに達する。途中、黄褐色粘質土下の灰黒色粘土中に横たわる径25cmの自然木をたち切っている。井戸内堆積土の上層は暗灰色粘土、下層は粘土を混えた暗灰色粘質土で、上層には焼けた木の削り屑を多量に含んでいた。出土遺物は藤原宮期の土器類の他、平瓦、曲物などの木製品がある。土塋SK02は南北に長い溝状を呈し、東および北辺は調査区外である。堆積土は木炭を含む暗灰色粘質土で、深さは20cmと浅いが、藤原宮期の土器が多量に出土した。土器の他に土馬1点、丸・平瓦少量がある。また調査区東南隅の土塋SK03からも藤原宮期の土器が少量出土した。

今回の調査地はいずれも条坊街区である坪



第20図 右京八条四坊周辺図(1:3000)

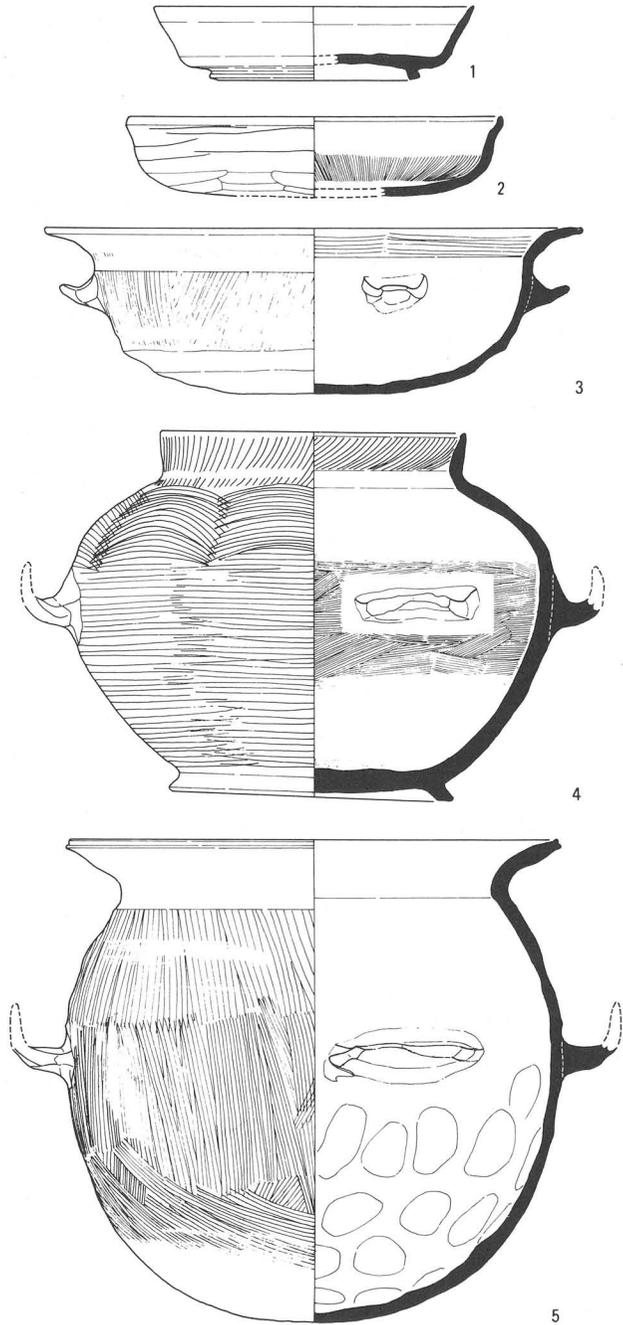
の南辺地域にあたる。A地点北方の同じ坪内では、かつて昭和19年に2ヶ所の井戸が暗渠排水工事に際して発見され、調査されている* (第20図×印地点)。こうしたことや今回の調査結果からみて、右京八条四坊一帯の遺構の遺存状況は良好とみられる。今後周辺地域の調査を進めることにより、条坊道路遺構や宅地遺構を確認する必要があるだろう。

* 日色四郎「高市郡畝傍町木殿出土土代井」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報第5輯』) 1955

5 右京十条一坊西北坪の調査（第37-19次）

（昭和58年5月）

この調査は農業用倉庫新築に伴う事前調査として、橿原市田中町において行なった。調査地は「天ノ藪」と呼ばれている小丘陵の北100mにある。調査は東西8m・南北2mの範囲を対象とした。調査区の中央で、現地表下80cmの位置に、長径150cm・短径90cmの、平面形が楕円形を呈する井戸を検出した。井戸枠は断面弧状につくった2枚の大きな板材を合わせたもので、接合部分には、おそらく井戸の径をひろげるために、別の板材を挟み込んでいる。井戸の深さは現状で1mあり、埋土には藤原宮の時代に位置付けられる土師器甕・壺・鍋・杯A・須恵器杯Bなどが含まれていた。調査地は藤原京右京十条一坊の西北坪内にあり、まだ不明な点が多い京城南部での条坊の実態を究明する重要な手がかりとなろう。



第21図 井戸出土土器（1：4，1は須恵器 他は土師器）

6 (藤原京) その他の調査概要

a 右京八条三坊の調査 (第37-1次)

(昭和58年4月)

この調査は駐車場用地造成に伴うもので、東西15m・南北3mの45㎡について行なった。調査地は橿原市城殿の集落の東方に位置し、本薬師寺伽藍中軸線の東約265mにあるので、西二坊坊間小路の存在が想定される地点にあたる。調査区内での地山面は、現地表下1m前後の弥生式土器を包含する暗茶褐色粘質土層および黄褐色粘質土層面であり、遺構は地山面の上面で検出した。調査区の西端約3mの範囲には、砂層を堆積層とする南北方向の溝がある。この溝は深さが80cm以上あり、東岸を確認したのみで、西岸は調査区のさらに西方に想定される。調査区の東半部では、幅7m以上、深さ90cm以上の溝状落ち込みと、調査区の東端よりに斜行溝の西肩を検出した。これらの遺構は、出土遺物からいずれも中世以降に属するものと考えられる。おそらく約200m東方に北西流する現飛鳥川の旧河道にかかわるものと推定され、坊間小路はそうした後世の河川の浸蝕作用、あるいは人為的な地下げ等により削平されたのであろう。

b 右京七条二坊の調査 (第37-3次)

(昭和58年4月)

この調査は、都市計画道路拡幅工事に伴う事前調査として行なったものである。調査地は橿原市飛驒の集落の東北端にあり、藤原京右京七条二坊東北坪の東辺部にあたる。調査は、西一坊大路西側溝の想定位置を含め、東西11.3m・南北1.5mの範囲を対象として実施した。調査地の層序は、現水田耕土の下に青灰色を呈する粘質土が堆積し、その下は弥生時代中期から古墳時代前期の土器片を包含する黄灰褐色粘質土層となる。遺構は、現地表下0.45mの、この黄灰褐色粘質土層上面にあり、3条の南北方向の素掘り溝と、調査区の東端近くで深さ約10cmの落ち込み状遺構を検出した。この落ち込みの中には粘土や砂が層状に堆積しているので、溝の一部分と考えられるが、東端部は、近年の土

木工事で深く掘り下げられているため、詳細は明らかでない。

c 左京八条四坊の調査（第37－4次）

（昭和58年6月）

この調査は工場用地造成に伴う事前調査として、檀原市南浦町で行なったものである。調査地は天香久山の南方にあり、藤原京条坊の左京八条四坊西南坪にあたる。調査は南北8.7m・東西1.5mの13㎡を対象とした。厚さ20cm程の水田耕土の下で黄灰褐色粘質土層があらわれる。この層は厚さ90cm以上に及ぶ。遺構はこの粘質土層上面で検出したが、中世の遺物をわずかに含む数条の素掘り細溝と小穴があるのみで、藤原京の時期に属する遺構は遺存していなかった。今回の調査地の南方では、これまでの調査で、東三坊大路位置の周辺に、十条条間小路付近より北の東西300m以上、南北330mに及ぶ黄褐色系統の厚い整地土層のひろがり確認されており、造成時期は、藤原京の造営よりも古く、7世紀第Ⅱ四半期頃と推定されている。今回の調査区でみとめられた黄褐色粘質土層はその整地土に類似した土質を示している。両者が一連のものとするれば、整地範囲はさらに広くなり、南北400m以上にも及ぶことになる。

b 左京八条三坊の調査（第37－8次）

（昭和58年9月）

この調査は宅地造成の事前調査として、檀原市南浦町で行なったものである。調査地は天香久山南麓にあり、藤原京条坊の左京八条三坊西北坪にあたる。調査は南北10m・東西3mの30㎡を対象として実施した。調査地の土層層序は、水田耕土、床土の下に堅くしまった灰褐色粘質土層（厚さ10cm）があり、花崗岩の風化した黒灰色砂質土からなる地山面に至る。地山面は調査区北端で現地地表下80cmにある。遺構は5条の南北方向の素掘り細溝と浅い土壇1に限られるが、いずれも地山面で検出した。藤原京の時期に属する遺構は遺存していなかったが、地山面上の堆積土の中には、土師器・須恵器や瓦片が含まれており、周辺地域に京条坊街区が営まれていたと想定することは充分可能である。

e 左京九条二坊の調査（第37－13次）

（昭和58年11月）

この調査は宅地造成の事前調査として、檀原市田中町で行なったものである。調査地は現飛鳥川流路の北東約40 mにあり、東二坊大路の想定位置にあたる。調査は東西7.5 m・南北2 mの15 m²を対象として実施した。調査地の土層層序は、水田耕土、床土の下に河川堆積層が4層つづき、現地表下70 cmで、黄色粘土からなる地山層に達する。遺構は床土面で検出した、数条の南北細溝に限られる。遺物には、地表下50 cm前後の位置にレンズ状に堆積した小礫層から出土した7～10世紀頃に属する土器片と、藤原宮期の複弁8弁蓮華文軒丸瓦1点がある。こうしたことから、この一帯は藤原京廃都後、飛鳥川の氾濫原となった時期があり、京条坊関連遺構もそのために浸蝕されたものと考えられる。

f 左京九条三坊の調査（第37－14次）

（昭和58年11月）

この調査は農業用パイプハウス建設の事前調査として、檀原市南浦町で行なったものである。調査地は大官大寺の寺域に西接する、左京九条の東三坊大路の想定位置にあたる。調査は東西7 m・南北2 mの14 m²を対象として実施した。調査区の土層層序は、上から水田耕土、床土、茶褐色粘質土、黄褐色砂質土と続き、現地表下140 cm以下は湧水の著しい灰色礫層が厚く堆積している。地表下30～40 cmの茶褐色砂質土層上面では、東西・南北方向に走る、幅30 cm前後の素掘り細溝を10条検出し、また地表下70 cmの黄褐色砂質土層上面で、調査区の西端から2 m東の位置に、南北溝の東岸を検出した。この南北溝は、調査区西端では、遺構面より110 cm深くなり、さらに調査区の西外側に深く広がっている。溝内には粗砂や粘質を帯びた細砂が層をなして堆積しているが、存続時期を決める包含遺物を欠く。調査区のある水田は、西方約15 mを北流する百間川に沿った低地帯にあり、周辺よりも1 m程低い。検出した南北溝はおそらくこの旧河道の一部と考えられ、藤原京東三坊大路に関する遺構は流水により浸蝕され、完全に削平されてしまったとみられる。